
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Zの軌跡~

長いヴァーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～Zの軌跡～

【Nコード】

N3612Z

【作者名】

長いヴァーチェ

【あらすじ】

アルバートが倒されたことにより崩壊するウロボロス。ライブメタル・モデルZは一人残り、仲間のモデルH達を助けようとするが、モデルVによって異空間に飛ばされてしまう。

一方、ミッドチルダでは、時空管理局“特務零課”とよばれる特殊部隊の隊員、マイティが裏で暗躍していた。

第0話「共鳴」（前書き）

こんにちは。長いヴァーチエです。

ロックマンZX Aの続編が出る気配がないので勢いでこの小説を書いてみました。ちなみに初投稿です。

この小説は前半はモデルZとオリジナルのキャラが主人公です。リカルなのは本編のキャラは後半から出す予定です。

はじめての小説なので、文章がおかしかったり、表現が変だったり、誤字脱字が多かったりと、いろいろ問題があるかもしれませんが、どうぞよろしく願います。

長々とすみません。

では

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜Zの軌跡〜

始まります。

第0話「共鳴」

第0話「共鳴」

『…エール、グレイのことはまかせたぞ…!』

自ら神を名乗り、世界を支配しようとした男、マスター・アルバー
トは運命を変えようとした少年に破れた。それは、彼が始めた数百
年に及ぶ、運命のゲームが終わった瞬間だった。

灼熱の爆風が駆け巡り、新たな世界の礎となるはずだった神の城・
ウロボロスは今、崩れ去ろうとしていた。その崩れゆく城の中に人
影が4つ倒れている。

「リカイフノウ、リカイフノウ」

「恥ずべき誤算。このままでは…」

「一体どうなってるんだ…。確かに意識を封じ込めたはずなの
だ。」

「体が重い。このまま終わるなんて…。」

英雄の力を継ぎ、世界の王となりうる資格者、ロックマン。彼ら4
人は今、紅き英雄の魂が込められた金属、ライブメタル モデルZ
に動きを封じられていた。

『言っただはずだ。モデルH達のことは俺の方がよく知っている…。』

□
モデルZは倒れている4人の側で浮遊していた。倒れている4人が持つライブメタル モデルH P F LはもともとはモデルZの仲間であったが、研究所から強奪された際、意識を封じられ、敵の手に渡ってしまった。取り戻す方法はモデルH達に掛かっているプロテクトを外し、意識を回復させるしか方法はない。

モデルZは動きを封じ込めている間、モデルH達に掛けられたプロテクトを次々と外していった。プロテクトは嚴重に掛けられていたが、モデルZにとってそれらを外していくのはあまり苦勞しなかった。

『これで最後だ!!』

ついに最後のプロテクトにたどり着いた。モデルZは意識を集中して最後のプロテクトの解除に取り掛かる。これさえ外せば、モデルH達は意識を取り戻す。これさえ外せば終わる、はずだった…。

『何？プロテクトが…。』

突然、モデルZはプロテクトが外せなくなった。いや、外していたプロテクトが消えたのだ。忽然と…。

『…一步、遅かったか。』

もうそこには4人の姿はなかった。あと、一步というところで彼らは何者かに転送されたのだ。

アルバートが死んだ今、彼らを助けられる奴はいないはずだ。一体、誰が…。

少なくともこれでモデルH達の奪還が失敗に終わったのは確かだった。

『……………。』

周りでは、至るところから炎が噴き上げていた。城から無限に生み出され、幾度と自分たちの邪魔をしてきた機械生命体、イレギュラー達も崩れ落ちてくる瓦礫に潰されてゆく。つい先程、死ぬつもりはないとエールに言ったが、この状況での脱出はかなり厳しい。モデルHたちがいれば、状況はかなり好転するはずだった。その上で死ぬつもりはないとエールに言ったのだが、まさか転送されてしまうとは夢にも思わなかった。

モデルZは久しぶりに自分の死を覚悟した。記憶は消されていて、このジリジリと迫ってくる死の予感はずべてではない。そんな感じがするのだ。しかし単機での脱出できる可能性は無いわけではなかった。限りなくゼロに等しいのだが…

『可能性があるならば、そこに賭けるしかない!!』

そう、諦めたらそれで終わり。最後まで自分を信じてはじめて可能性が拓けられる。

そしてモデルZが行動を起こそうとした、その時だった。

ゲオン

爆発音に混じって、かすかに聞こえる音…。初めは空耳だと思い、音の正体を深く考えようとはしなかった。今のモデルZにはそんな

ことを気にしてる余裕がなかった。

グオン グオン

地の底から響くような、重々しい音が次第に大きくなっていく。と同時に、周りが、まるで音にあわせるように、赤く光りだした。

『モデルVが共鳴している、だと？』

ライブメタル・モデルV。それは数百年前に偶発的にできたライブメタル。すべてのライブメタルの元祖とも言える。

ライブメタル・モデルVは他のライブメタルとは違って個体数が非常に多い。そのすべてが融合したものが、今いるウロボロスである。そのため、ウロボロスの内部はモデルVの特徴でもある、赤いクリスタルが至るところに露出しており、臓器のように蠢いている。しかし、アルバートが倒されたことで活動停止し、朽ちていくだけだと思われていた。

『何故、今になって活発になる？アルバートは死んだ。もう、誰もお前達を必要としていない。ここで消え去れ！』

モデルVは嘲笑うかのように共鳴している。

突然、モデルZの足元（といっても、ライブメタルであるモデルZに足はないのだが）が消えた。

『なっ！？』

足元には、先程までなかった、巨大な赤黒い空間がポツカリと口を開けていた。床に落ちていた、壁の欠片が音もなく吸い込まれていく。

『あの中に落ちたら…』

俺はもう二度と、この世界に戻って来れない。

モデルVの共鳴が続くにしたがって、空間の穴はどんどん大きくなっていく。

『モデルVの仕業か…。』

そう、この現象は全てモデルVが引き起こしていた。ウロボロスを構成する、全てのモデルVがアルバートに力を与えていたと当初は思われていた。だが、いくらアルバートとはいえ、一人でこれだけのモデルVを扱いきれるわけがない。

結果、アルバートが使用していた分のモデルVは全体の4分の3である（これだけ制御できたということ自体、十分すごい。普通はその1%の欠片でも制御するのが困難だからである。神を自称するだけの力と精神力はあったわけだ。）
一方、使用されなかった4分の1はイレギュラーを無限に生み出し、巨大なウロボロスを海上に安定して浮遊させるための動力源として機能していた。

そして、アルバートが死んだ今、その4分の1は今まで行ってきた機能を全て放棄し、別の行動に移ろうとしていた。

ライブメタルとは意思を持つ金属。この状況下で彼ら（？）が起す行動はただひとつ。

すなわち……

『脱出』。

モデルV達は異空間に逃れようとしていたのだ。

今や、赤黒い空間はモデルZの周りを覆いつくしていた。

モデルVでできた床、天井、壁が空間に次々と飲み込まれてゆく。

圧倒的なまでの力の流れ。

爆発の光さえも飲み込まれていった。

『……』

どうあがいても絶望、とはこういうことか。

圧倒的な力の流れに逆らうだけの力をモデルZは持ち合わせていなかった。

だから、なすすべもなく……

飲

み込まれた。

第0話「共鳴」（後書き）

第0話完。

オリキャラのマイティは次回から登場です。

あと、モデルVの異空間を開く能力、という設定は

「モデルHのところで、比較的ちっこい（人間と比べたら当然でかい）モデルVが一個で重力を狂わせたから、たくさんいれば空間を狂わせて、異空間に飛ぶ（？）ことも出来るのでは!？」

とこのような妄想（想像）から作りました。

次回もどうぞよろしく。

第1話「汚れ役」(前書き)

いよいよオリキャラ「マイティ」が登場します。

魔法少女リリカルなのはStrikers ～Zの軌跡～

始まります。

第1話「汚れ役」

「き、貴様！こんなことをしてただで済むと思っっているのか！！」

薄暗いホテルの部屋の中で老紳士が叫ぶ。老紳士は恐怖と戦いながら目の前の男を睨み付けた。

男の右手には銃が握られており、足元には自分の秘書が倒れていた。美人と評判だったその女性の顔は恐怖でひきつったままだ。ちなみにもう死んでいる。

「私は時空管理局の中でも絶大な権力を誇る、提督なのだぞ！！貴様ごとき、私の声ひとつで終身刑にする事もできるわ！！」

「……………」

老紳士の息は荒く、声は恐怖で震えている。

対する男は静かに老紳士を見据えていた。その眼光はまるで獲物に襲い掛かるうとしていた鷹のようだ。

老紳士は一言も話さない男の不気味さに気圧されていた。

自分は提督。時空管理局の中でもかなりの地位で、そして市民や部下からの信頼も厚い。魔導師でないため、地位に就くまではかなり苦労した。が、それに値する絶大な権力と富を手にいれることができた。そこらの若造共とは、わけがちがう。この私に出来ないことはないはずだ！

しかし老紳士は目の前の男を権力でねじ伏せられなかった。老紳士に不安の波が押し寄せる。

「貴様の目的は何だ？」

老紳士が恐る恐る尋ねる。すると、今まで黙っていた男の口が開いた。

「お前の命だ。」

「!？」

「お前は市民や局員から尊敬を集める一方、…」

一呼吸置く。

「特務零課を使い、各地の聖王教会の関係者を次々と消してきただろ？」

老紳士は“特務零課”という言葉に反応する。

「な、何故お前ごときが、特務零課の存在を知っている？」

「何故かだと？それはな……………俺も特務零課の隊員だからだ。」

その言葉を聞いた途端、老紳士の顔は恐怖で歪む。

殺される!!

まさか、聖王教会の連中が奴らを買収したのか？いや、そんなわけはない。特務零課は仮にも時空管理局の一部隊。部外者に手を貸す程、お人好しのはずが……………いやいや、奴らはイレギュラ

「な存在だ。金のために裏切ったっておかしくはない、血に飢えた殺人集団だ。ん…？」

待てよ…。

何故、特務零課を使って聖王教会の神父どもを殺害したのがこの「私」だと、向こうは知っているのか？神父どもは聖王教会にとってさほど価値はないはずなのに…。

足元に力が入らなくなり、老紳士はそのまま座り込んでしまった。

「た、頼む。助けてくれ！！命だけでも…。お願いだ…。」

老紳士は泣きながら、地面に手をつけ、土下座をする。自分の命のために、「提督」というプライドを棄てたのだ。

「……………はあ。」

男は溜め息をつく。

「おそらく聖王教会の連中も殺される前にそうやって命乞いしたのだろう。直接、手を下したわけではないので詳しくは知らないが…。」

老紳士は額を地面に付けながら男の言葉を黙って聞いている。

「俺の知る限り、命乞いをして助かった奴は一人もいない。」

その言葉は老紳士にとって死刑宣告だった。

「最後にひとつ教えてやる。」

男は銃口を無理矢理、老紳士の口の中に押し込む。老紳士は抵抗しようとしたが、恐怖で身体が思うように動かせなかった。

「お前を殺すよう指示をだしたのは聖王教会ではない。」

老紳士の目が驚愕のあまり大きく開く。

聖王教会ではない？なら一体、誰が？

「……………時空管理局。」

「!？」

「お前の地位を狙っている奴からの指示、いや依頼だ。」

そんな…、そんなことが……………。

「ただ、そいつが狙っているのは時空管理局の地位じゃない。お前が所属する“教団”の地位だ。」

なっ……………。

「風の噂じゃ、向こうでも結構良い立場だそうだな。聖王教会の連中を殺すことで、奴らの信頼を手に入れたのか？」

「……………」

……………。

「ん？……………何だ、もう死んだのか。」

男は老紳士の口から銃口を引き抜く。すると老紳士の遺体がそのまま床に倒れた。

「任務完了。」

男はそう呟くと、ホテルの部屋を出た。

ホテルを出た直後、男の通信端末に通信が入る。

「私だ。」

通信の主は今回の依頼人だった。この局員には今までにも何度か依頼を受けたことがある。ほとんどが殺しの依頼なのだが。ちなみに、お互い保身のため、機械で声を変えて通信することになっている。そのため雑音が少し入るが、あまり問題にはならない。

「任務完了だ。もつとも、目当ての奴は俺が手を下す前にショック死したかな。あと、死体の後始末だが…」

「ああ、それはこちらに任してくれ。捜査員の中には私の部下が数人配属されている。死因の偽装、証拠の捏造や隠滅はお手の物だ。」

「放送メディアに対しては？」

「そこもすでに手を回した。ほんのちょっと圧力をかけただけで簡

単にこっちの言いなりさ。あそこの局長の慌てぶりは結構見ものだったぞ。』

下衆だな。

『ん？。何か言ったか？。雑音で聞き取れなかったのだが。』

「………………。わかっているとは思いますが、あまり下手な真似はするなよ。」

『わかってるわかってる。あんたらの報復は恐ろしいからな。だが、そちらも“教団”のことであまり変なことをしないでくれたまえ。』

「安心しろ、と言いたいところだが、“教団”を快く思わない奴から依頼を受けた場合はそういうわけにはいかない。依頼通りに任務を実行する。」

『……………はあ。こちらが使う時は頼れる便利な道具なのだが、敵にまわると、この上なく面倒だな。』

「……………。」

『まあいい。そのほうがこちらとしても付き合やすい。これからもよろしくな、マイティ。』

良い夢を、の言葉を最後に通信が切れた。

「ふん、何が“良い夢を”だ。」

人を殺した夜にそんなもの見えるわけがないだろ。自分で邪魔者も

消せない管理職風情が。

マイティはビル街を歩きながら心の中で依頼人を罵った。もう夜遅いため、ビル街の明かりはほとんど消えており、歩いている人も数えるくらいしかいなかった。

今頃、街の子供たちはベッドで夢を見ているのだろう。

ふと顔を上げると、夜空に満天の星が輝いていた。

「星か…。」

思えば、あの頃が一番平和だったな。

マイティは悲しそうに星を見つめた。

第1話「汚れ役」(後書き)

今更ですが、小説書くのって難しいですね。描写とか特に。戦闘シーンに入ったら、どうしよう…。あと、マイティは一応、主人公です。

次回、モデルZとマイティが出会います。

次回もよろしく。

第2話「出会い」（前書き）

相変わらずの駄文ですが…。

魔法少女リリカルなのはStrikers ～Zの軌跡～

始まります。

第2話「出会い」

俺にも一応、子供らしい夢を持っていた時期はあった。遠い昔、俺の両親は二人とも時空管理局の職員でいつも忙しそうだった。だが、それでも子供だった俺をちゃんと育ててくれた。

「マイティの夢って何なの？。」

母が幼いころの俺に尋ねる。

「夢？。夢って、寝てる間に見る夢？。」

それを聞いた父が笑い出す。

「夢っていうのはな、マイティ。自分がやりたいことのことだ。人生の目標とでも言うのかな。」

「やりたいこと…。」

幼い思考がようやく行き着いた先は純粋な夢だった。

「お星さまをもっと近くで見たい！！」

それを聞いた両親は笑っていた。

「パパやママの夢は？」

不意に俺が尋ねた。

「パパやママの夢はね、お前だよ、マイティ。」

「え？。僕がパパやママの夢？」

「そうよ、マイティ。あなたが私達の夢よ。」

自分が両親の夢。

この頃は俺が自分の夢を叶えることが両親にとっての夢だと素直に思った。

そう、俺は幸せだった。醜い現実に気付かず、ただ作り物の家庭で都合のいいように飼われていた。

『特務零課の方ですか？。』

手持ちの通信端末に機械の音声が流れる。口調からして女性だと思われるが、あいにく声を変えているため歳がわからない。

「そっだ。お前は？。」

『私は聖王教会の者です。』

今度は聖王教会か…。昨日、それと敵対している“教団”の局員を消したばかりなのにな。まあ、あれは俺が直接、手を下したわけじゃないが…。

「聖王教会のお方が特務零課に一体、何の用だ？。言つとくが、夜のお誘いならお断りだ。」

『なっ！？。そ、そんなんじゃないありません！。変なことを言わないでください！。』

かなりあわてている。それに、この返し方…。こいつは相当若いな。肉体的にも、精神的にも。

「それはすまなかつた。では、そちらの用件を聞こうか。」

『は、はい。』

女の用件はこうだ。

先日、ここから遠く離れたゴーストタウンにて、聖王教会の布教活動をしていた信者達が何者かに襲撃され、音信不通になってしまった。

今回の依頼はその信者達の保護と、襲撃犯の逮捕もしくは殺害。

「つまり俺は駒か？。」

『え？』

「お前達聖王教会には騎士がいるだろ？なぜそいつらを使わないで、特務零課という不透明な部隊を使う？。」

『そ、それは……………。』

「身内を傷つけてしまっくらいなら、金で動く便利な道具を投入しようという考えか？」

『道具だなんて……………。』

「思っているだろ？」

『……………。』

「……………」

沈黙が二人の会話を支配する。
しばらくしてマイティが沈黙を破った。

「別に気にすることはない。俺達、特務零課は元々そのために作られた。いわば“使い捨ての道具”だ。」

『そうですか……………。』

相手の声が悲しく響いた。

ふと、マイティの頭の中に疑問が浮かんだ。

「ところで、お前達の所の信者はなぜゴーストタウンに行ったんだ？」

問題はそこである。いくら布教活動といっても、人のいないゴーストタウンに行くことは、ハッキリ言って意味がない。聖堂で聖歌で

も歌ってる方がまだマシだ。

相手は少し返事に戸惑っていたが、話し出した。

『……………これから話すことは他言無用でお願い出来ますか？』

「ああ。約束する。」

『そうですねえ…。あなたは“教団”をご存知？』

「ああ、お前達と対立している宗教団体だろ。対立しているといつても、規模がお前達、聖王教会よりも全然小さい。まあ、それでも少しずつ勢力を拡大しているみたいだな。」

『ええ。先程、布教活動と言いましたが…実は偵察をさせていたのです。』

「偵察…というと、そのゴーストタウンは“教団”の集会所かなのか？」

『はい。普段は誰も居ませんが、月に二、三度、そこで講演会があります。』

「で、お前の所の信者……………調査員はその講演会の日には蒸発したわけか。」

『いえ、本来なら無人と思われる日に、急に連絡が途絶えました。途絶える直前に聞こえたのは…』

何かが砕ける音、と調査員の断末魔の叫び。

「潜入した調査員の人数は？」

『二人です。』

「となると、もう一人も生きてはいないだろう。」

『でも、死んでいると言い切ることはできません。』

「なるほど。それで俺に“保護”しろと?。」

確かに、襲撃者に捕らわれている、という可能性も無くはない。しかし……

「襲撃者も未だに現場に残っているとは思えんがな。俺なら、殺したあとすぐにその場を離れる。」

『それでも、一応現場へ行ってください。何か痕跡が残っているかもしれないので……。』

「……………わかった。その依頼、引き受けよう。」

一体、何が起きたかわからなかった。正直、今自分が生きているのか、死んだのかもわからない。目の前には土砂崩れか何かで崩れかけたビルが立ちそびえている。

『1111は…一体……………』

どこなんだ？

もし死後の世界があるとしても、これはお粗末すぎる。周りには朽ちかけた建物が点々としており、一人っ子いない。とても極楽浄土とは言えない。いや、地獄だったとしてもいくらか味気無い。

といろいろ考察していると、後ろから物音がガサツと聞こえた。

『誰だ！？』

振り向くとそこには小さな猫がいた。

『捨て子か…』

猫の毛皮は美しいブロンドで、首のネームプレートには「アイリス」と彫られていた。

『アイリス…』

初めて聞く名前のはずなのにとても懐かしく感じる。

猫は彼…モデルZが気に入ったのかじゃれついてくる。それは不思議と不快に感じなかった。

さて、これからどうしたものか…。見たところ、もと居た世界ではない。この廃墟を見る限り、少なくとも建造物を建てられるだけの知性があることはわかる。また、アイリスのネームプレートの真新しさから、文明が滅んでいないこともわかる。

まずは人に会うことだ。

モデルZは移動しようとする。すると、アイリスがこちらを見つめながら、ニヤアと鳴いた。寂しいのだろうか。モデルZにはその目がなんだか悲しそうに見えた。

『俺は所詮、戦うことしか出来ないライブメタルだ。悪いが、お前には何もしてやれない。』

この声がアイリスに届いているかどうかはわからない。本来、ライブメタルの声は適合者にしか聞こえないからだ。

モデルZは心を鬼にし、その場を立ち去る。

しばらくしてから後ろを見ると、そこにはアイリスがいた。モデルZの後をついてきたのだ。

『やれやれ……。困ったものだな。』

この俺が手も足も出ないとは……。(ライブメタルだから手も足も元々ないが……)

一体、どうすればこの状況を切り抜けられる？

モデルZは悩む。

モデルVや他のロックマンとの度重なる連戦や異世界に飛ばされた反動のため、この時のモデルZの神経は著しく鈍っていた。

「……………見つかったのは猫一匹と怪しげなデバイスだけか……。」

『!?!?』

突然の声にモデルZは驚く。まさか、ここまでの接近を許すとは。

モデルZの目の前に、黒いコートを羽織った男が立っていた。男の目付きは鋭く、右手には黒い猟銃が握られている。銃の薬室があると思われるところには、丸い黄色のクリスタルが付いていた。

『お前は…』

男の顔は遠い昔に戦った敵の顔とよく似ていた。

『クラフト?』

モデルZとマイティが初めて会った瞬間だった。

第2話「出会い」（後書き）

今回はオリジナルの設定を紹介しようと思います。

『ディファイアント（待機モード）』

マイティの所持するデバイス。分類上ストレージデバイスだが、特務零課で造られた試作型のデバイス。

外見はショットバレルのショットガン。銃身は約40センチ。色は黒く、薬室（火薬の装薬を入れる部分）と思われる所には、黄色の丸いクリスタルが付いている。

銃身はかなり堅く、打突武器としても使える（本来の運用方法ではないが）。

ちなみにこれが「待機モード（またはガンモード）」
普段はコートの中にしまっている。

実験的に以下の機能が搭載。

- ・ 魔力弾の他に、実弾も撃てる。（質量兵器として使用可。）
- ・ 他人のデバイスの人格AIの“声”を盗聴可。

いつ書き終わるかわかりませんが、次回もよろしくお願いします。

第3話「白い影」(前書き)

昨日、生まれてはじめてチョコボールの銀のエンゼルが当たりました。

魔法少女リリカルなのはStrikers ～Zの軌跡～

始まります。

第3話「白い影」

「ここで殺されたわけか…。」

目の前には血で汚れた壁。壁一面に血が飛び散っていた。時間が経っているため、乾いて黒ずんでいる。それでも仄かに鉄のような香りがした。

この血の持ち主は今のところ見当たらない。証拠隠滅のため、どこかに隠したのだろうか？

しかし証拠隠滅だとするなら一つおかしい所がある。この血濡られた壁だ。

なぜこれがそのままの状態に残っているのか？

まるで見せつけているようだ。

見せつけている？

ということ…、

「警告……ということか。」

通信記録に残っている、調査員の断末魔の声。おそらく、二人の調査員は“教団”にとって重要な“何か”を掴んだのだろう。そして、その事が向こうに知られた結果、“口封じ”のため殺された。

確かに一理ある。がそれを裏付ける証拠がなければ、所詮ただの推

測だ。

これ以上壁を睨みつけるのも時間の無駄と思い、マイティはコートから黒い猟銃を取り出す。

この黒い猟銃は彼のデバイスで、名はディファイアント。非人格AI搭載の、ストレージデバイス……ということになっている。というのも、特殊部隊用に実験的に搭載された機能がいろいろと法律に引っ掛かるため、一般的によく使われるストレージデバイスの名でごまかしているのだ。

そして今、マイティが使おうとしている機能も法律に引っ掛かるものだった。

「…ボイスサーチ。」

ディファイアントのクリスタル部が光り出す。

この機能の特徴は、他人のデバイスの人格AIの声を盗聴することだ。

人格AIを搭載しているデバイスの持ち主は、デバイスと意思疎通している。

この機能を使えば、相手が何を考えているのか、次に何をしようとしているのか、などを先読みすることだって可能だ。

もっとも、相手のデバイスに人格AIが搭載されている場合だけ機能するのであって、そうでない場合はただの役立たずだ……。

まあ、起動させておくことに越したことはないだろう。

一時間が経過した。

マイティはあれから現場周辺を歩きまわっていた。

「特に怪しいものも無いな。」

おそらく、二人の調査員の身柄は、向こうの手にあるのだろう。ボイスサーチにも何の反応も無い。

これ以上は時間の無駄か…。

マイティが調査の結果を依頼人に連絡しようとしたその時だった。

『……………しか出来ないライブメタルだ。悪いが、お前には何もしてやれない。』

かかった！

ボイスサーチがデバイスの声をキャッチしたのだ。

マイティは手に持っている通信端末をコートにしまう。

敵は人格AI搭載のデバイスをもつ魔導師。おそらく“教団”の回し者に違いない。デバイスの話し方が偉そうに聞こえるが、そんなことはたいした問題ではない。

今まで気配を隠しきってたのはさすがと言えよう。だが、これで終わりだ。

「……………」

しばらくしてマイティは声の主を見つけた。

しかし、その正体は彼の予想を大きく裏切った。いや、越えていたと言っべきか…。

「……………見つかったのは猫一匹と怪しげなデバイスだけか…」

期待ハズレもいいところだ。

これを依頼人に報告しろと？

そのデバイスは紅く、手のひらくらいの大きさで、小さな目のようなものが二つついている。

「お前は……………クラフトか？」

？俺を主人と勘違いしているのだろうか。

「クラフト？。それはお前の主人の名前か？」

主人の名を呼び捨てにするデバイスとは、なかなか興味深い。聞いたこともない。

「主人？いや、昔戦った敵の名前だ。」

「それなら、お前の主人は？」

『俺に主人なんていない。』

「どういうことだ？」

こんな感じにマイティとモデルZは質疑応答を繰り返した。

「つまり、お前はその、モデルVというデバイス…ライブメタルが作り出した歪んだ空間に吸い込まれて、気がついたらここにいた、ということか？」

『……ああ。』

マイティはため息をつく。

なんて面倒なものを見つけてしまったんだ…。

「モデルZ、お前みたいなやつをこの世界では次元漂流者と呼ばれる。いや、お前の場合は次元漂流物かな。つまり、簡単に言えば時空の迷子だ。」

『その次元漂流者はこの世界ではどんな扱いを受ける？』

「時空管理局での保護。……ただ、お前の場合はそうもいかないだろう。」

『どづいつことだ？』

「保護を受ける対象はあくまで“人”だ。“物”の場合、おそらく技術部門の奴等に弄ばれると思う。お前みたいな異世界のデバイ

スはこちらとしては格好の研究資料だからな。それより……。」

マイティが言葉を一旦、区切る。

「これからお前はどつする?。」

『……………。』

モデルZは考える。

ここは俺の全く知らない世界、魔法の世界だ。一人でさまよったところで、時空管理局に見つかるのは時間の問題だろう。それに……………。」

モデルZは（すっかり空気になっていた）アイリスを見る。

こいつを助けたい。このままでは飢え死にってしまう。

モデルZは意を決した。

『マイティ、俺とこの猫を時空管理局に引き渡してくれないか。』

「……………猫はともかく、お前の場合、無事という保証は無いぞ。それでもいいのか?。」

『ああ、仕方ない。俺はこの世界について何も知らない。情報を手に入れるためにも、時空管理局に入り込むしかない。』

「そうか、わかった。ただ、その猫は時空管理局よりも聖王教会の方がいいだろう。」

『聖王教会？』

「巨大な宗教団体だ。時空管理局とも縁が深い。それに時空管理局と違って、いくらか命に対する道徳を持ち合わせている。」

『そうか……。』

そして二人は聖王教会へ向かった。

「司祭、彼女が管理局と接触しました。このルートは……
…聖王教会です！」

「そうか。予定通りだな。」

まさか、ここまで予定通りだとは。

これも神の導きか…。

「ここからは計画通り、しばらく活動を控え、我らが主の欠片を探すことに専念しよう。」

「わかりました。すぐに兄弟達を向かわせます。」

「よろしい。全ては教団のため…！」

全身、白い法衣を纏った男が声を張り上げる。男は白い三角形の面

を着けている。目があると想像するところには黒い穴が空いていた。

「全ては我らが主のため！！！！！！！！！！」

そう叫ぶ男の視線の先には、禍々しい光を放つ巨大なライブメタル
…モデルVが浮かんでいた。

第3話「白い影」(後書き)

アカルイミライヤー

次回もよろしく。

それと作品中、意味不明なところや質問がありましたら、感想のところで述べて貰えると助かります。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3612z/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Zの軌跡~

2011年12月17日09時46分発行